

# 私に影響をあたえた一冊

basarakatai

## 私に影響をあたえた一冊

---

私に影響をあたえた一冊とは、たくさんの愛読書の中から一冊を選ぶことは、難しいことですが、その前に私の自作である「なぜ？本を読むことは大切なのか？」を聞いてください。

「なぜ？本を読むことは大切なのか？」

本を読むことによって、言葉を覚え、生活の知恵を学び、人はひとりでは生きていけないことを教えてもらい、涙をながしたり、心に温かいものを感じたり人が行くことの出来ない世界へといざなってくれる。

また、絵本の「絵」も芸術作品のひとつとして鑑賞することができ、本を読むことによって、辛い現実を忘れ、熱中できる（いいこと）ずくめである。

この「メッセージ」を発表してから幾日たったのだろう、その時にもどってお話しなくてははいけません。

そのころは、「暗い暗いトンネルの中」「夜明け前の恐さかな！」「暗い暗いトンネルの中」そんな時に出会ったのが、児童書である、「児童書」とは、小学生の「読み物」である。「いぬいとみこ」作・「木かげの家の小人たち」の作品です。この本は今、小学生の国語の教科書の「必読書」になっています。今までもそしてこれから先もよみ継がれていく「児童書」の一冊にちがいありません。

## 「木かげの家の小人たち」

---

「木かげの家の小人たち」この本を書いた「いぬいとみこ」さんは、外国の「ピーターパン」などのお話のなかにでてくる「小人」や「妖精」を「日本」の話の中に書きたかった、と、言われています。いぬいさんの作品には、「たくさんの小人たちがでてきますよ」

では、このお話を紹介しましょう。

この本は、「明治時代から昭和戦後くらいまでのお話」です。

明治時代の中ごろにイギリスから日本にやってきた英語の先生 ミス・マクラクラン氏がイギリスに帰るとき、達也ならこの「小さい人たち」の面倒を見てくれるだろうと譲りわたしました。この小人たちには一日一回必ずミルクを与えること。そして誰にも見られてはいけないこと。大正二年の夏休みに達夫の持つバスケットに揺られイギリス生まれの二人の小人たちが達夫の家にやってきました。ここから楽しいお話の始まりです。

さて、この本と出会う前は、「同じ事ばかり」考えていました、でも、この本と出合ってから「無我夢中」で時間を忘れ「読み続け」30分でも40分でも「嫌なことを忘れさせてくれた一冊なのです。他の方は、本の中に書かれている「言葉」に勇気をもらうのですが、私は違いました。

「時」を忘れさせてくれました。この本は「本の楽しさを知ってこそ生きる力がわいてくる」作品なのです。